

「オ、寒うなつてきた歸ろう」

と致しますと、腥臭い風が、ブーと吹いて來ると、ヘンチキの身體がウーンと張りました。

「ウーン、ハ、ン、墓返しを仕たので崇つたのんやな、何くそめ」

行かうとしても歩けまへん。

「髑髏が身を入れたんやなア」

と元の髑髏を持ちますと歩きますので、髑髏を懷中へ入れて内へ歸つてきましたが、髑髏を佛壇の前へ供へ、お燈明を上げて念佛を唱へて回向を致しましたが、獨身の事で、其儘ぐぐつと寝て仕舞ひました。夜は次第に更けて世間はシーンと致しますと、表の戸をば、トントン、トントンと敲いて

「チョツとお開け……(トントン) チョツとお開け」

「ア、ツアアツア、睡たいなア、誰や戸を敲いてる、何方」

「チョツとお開け」

「女の聲やな、何方」

「今日一心寺でお目に掛つた者で御座ります」

「ナニ、一心寺でお目に掛つた者、誰もお目に掛けへんで、モシ、家が間違ふて居まへんか」

「アノ、ゆうで御座ります」

「ヘエ、おゆうさん、そんなお方知りまへんで」

「アノ、れいで御座ります」

「おれいさん、そんなお方存じまへんで」

「アノ、ゆうと、れいとで御座ります」

「ナニ、ゆうとれいと、ゆうれいつワ……ア、左様うか、濟まん事を致しました、ほんの出來心で、持つて歸りましたんや、明日早速お返しに参ります、どうぞ今晚の處は」

「アノ、怨を云ひに参りましたのでは御座いまぬ」

「ア、……さようか……そんなら何しにおいなはたんだす」

「お禮に参りました」

「それは遠方の處を宜うこそ御越し、別にわざわざ來て頂かいでも、手紙で結構でおます」

「チョツと、こゝ開けて」

「ブル／＼、なんの開けられますかいな」

「開けて下さらねば、戸の隙間より」

障子へ明火が差したかと思ふと、髪をオドロに亂した、色の青白い、年齢の頃は十八九の女が、前へズウ……と這入つて参りました。